

イロイロ知りたい！ 心理学史

【第11回】

波瀾万丈の人生：アンナ・ベルリーナー

—— 日本を訪れた最初の女性心理学者

サトウタツヤ



立命館大学文学部教授／研究部長。俗に「人生いろいろ」と言いますが、今回の人生はすごい！とはいえず真などは白黒しか残っていないことが多く、構成に苦慮しました。思い出はモノクローム、というわけではないですが、次回からは新シリーズになります。

1924（大正13）年、当時の心理学界において、唯一の総合的学術誌と言ってもよい『心理研究』に「他人を風貌で判断することが出来るか」という論文が掲載されました。著者はアンナ・ベルリーナー（Anna Berliner；1888-1977）。この女性はウィルヘルム・ヴントのもとで博士号を取得した（1914）唯一の女性として心理学史上に名を残す人物です。博士論文のタイトルは『感覚的印象の主観性と客観性』というものでした。



写真1 アンナ・ベルリーナー

これくらいのことは心理学史の研究者なので知っていたのですが、あるHPを見たところ、アンナの人生はそんな単純なものではない、ということがわかりました。たとえば、この時代のドイツにおいてユダヤ人の家庭に生まれた、と言うだけで少しは想像できることもあるでしょう。

また、ヴントのもとで博士号を取ったことについても、最初、ヴントは女性を博士候補生にすることに難色を示していたのです。障害を乗り越えて博士号を取得したアンナは、1913年、結婚相手であるジークフリート・ベルリーナー（1884-1961）と共に日本に滞在していました。ジークフリートが東京帝国大学の商学（経営学）担当講師として法学部に所属する

ことになったからです。

しかし、第一次世界大戦勃発に伴い、1914年にジークフリートは応召されチンタオで作戦中に日本軍の捕虜となってしまいました。そして日本の丸亀収容所に移送されました。この間、妻のアンナは日本に滞在していたのですから、ある意味で夫が戻ってきたという表現も可能かもしれません。アンナは丸亀に居を移し、可能な限り夫と面会をしていました。この収容所は寺院を転用したもので、捕虜収容にはむいておらず、また、捕虜の扱いにも不適切なことがあったようです。1917年4月に板東収容所が新設されるとそこに収容されました。この収容所は、日本で最初にベートーヴェンの第九交響曲が演奏されたことで有名です（1918）。ベルリーナー夫妻も何らかの形で関わっていたかもしれません。ジークフリートは1919年に解放された後も（他のドイツ兵が国に帰ったのとは異なり）東京帝国大学の経営学の教授として日本に滞在し続けました（1920-1925）。1922年にアルベルト・アインシュタインが来日した際には、夫妻が東京の自宅に彼を招いて交流を深めています。当時の彼の日記にはアンナのことが「優雅でかつ知性もある女性」として記されています。

彼女は日本の広告に興味をもち著書を刊行しています。また、茶道を始めてそのことについても論文を書いています。

1925年にベルリーナー夫妻は

ドイツに帰国しましたが、1933年にナチスが政権を掌握してユダヤ人への弾圧を加えたこともあり、1938年にはアメリカに亡命しました。アメリカでは日本語教師もしていたそうです。その後、パシフィック・グルーヴ大学の教授として定年を迎えたアンナ。老後は穏やかな日々と思いきや、夫の死後、一人暮らしのアンナは薬物依存症の少年に自宅に押し入れられ、殺害されて人生を終えたのでした。1977年、享年88才でした。夫妻のお墓はハノーファーのユダヤ人墓地「アン・デア・シュトラングリーデ」にあります。



写真2 アン・デア・シュトラングリーデ

文献

アンナ・ベルリーナー（1924）他人を風貌で判断することが出来るか。『心理研究』25, 319-327. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsy1912/25/144/25_144_319/_pdf

ハンス・コンラート・ローデ（2012）ジークフリート・ベルリーナー（1884-1961）について：日本で暮らしたあるドイツ人。2012年7月12日トリーア（および同年10月30日ベルリン）独日協会における講演（訳：小阪清行）<http://koki.o.o7.jp/Berliner%20Rode.htm> 写真2点もここから引用。